



## 通常の学級における特別支援教育のさらなる推進に向けて ～学校巡回訪問を振り返って～

☆ 今年度から、河内地区にインクルーシブ教育エリアコーディネーター（以下、エリア Co）が配置されたことは、本紙第 82 号でもお知らせしたところです。本号では、学校巡回訪問を通して見てきた「通常の学級における特別支援教育を推進するに当たってのポイント」についてまとめてみました。好事例も含め紹介します。

ポイントは、概ね次の 3 点にまとめられるのではないかと考えます。

- 児童生徒理解
- 学級集団づくり
- 校内支援体制

### □ 児童生徒理解

適切な児童生徒理解がなければ、適切な指導・支援につながらず、児童生徒との信頼関係を構築していくことが難しくなります。

問題行動等がある児童生徒の理解においては、「何に困っているのか」を真っ先に理解し支援することが重要です。「困った子」ではなく「困っている子」という視点で理解していくということです。

「困り感」を理解しようとする際、発達障害に関する知識は役には立ちますが、大切なことは様々な側面から、対象児童生徒の全体像を捉えるということです。「うまくいっているところ」「得意なこと」「好きなこと」も、しっかりと知ることが重要で、これらが今後の指導・支援の手がかりにつながります。

児童生徒理解のためには、行動観察ばかりでなく、しっかり本人と対話をすることが重要です。教職員自ら時間を確保し、対象児童生徒の言葉に耳を傾けることは、児童生徒理解のための基本的姿勢と考えます。

なお、「指示に従える子」「おとなしい子」「前向きにがんばっているように見える子」は、一見問題がないように見えますが、もしかしたら「苦しいこと」「困っていること」を過剰に我慢している場合があります。教職員は、日頃から児童生徒の姿からその一歩踏み込んだ奥にある「困り感」に気付くアンテナを磨いておく必要があります。

### <好事例>

授業者は、対象児童生徒の実態に応じた小さな課題プリントや質問を準備しており、すべての児童生徒が授業に前向きに取り組んでいる。（その課題プリントや質問は、必要に応じて他の児童生徒にも活用している。）

- 授業者が対象児童生徒を適切に理解していたため、自己肯定感を高めるための個別の教材等を準備し、一斉指導において活用することができた。

### □ 学級集団づくり

困っている児童生徒を学びの場や教職員の指導等に無理に適応させようとすると、問題行動等がより外在化したり内在化したりすることがあります。そればかりか、その様子を見ている他の児童生徒にも不安を与えることとなり、学級全体が落ち着かなくなっていくことにつながることもあります。

そもそも児童生徒は無意識のうちに「みんなと同じように行動しなければ…」と考えてしまうものです。それがうまくいかないと感じる児童生徒は、逃げ出したり過剰にがまんしたりしながら自己肯定感を下げ続けていくことになるかもしれません。

しかし、「□ 児童生徒理解」でも述べたように、教職員が児童生徒の「困り感」を受信するアンテナを磨き児童生徒の心の内をキャッチすることに努めれば、在籍児童生徒の数だけ多様な状況があるというところに自然とたどり着くと思います。つまり、学級を構成している児童生徒は、「誰もが違う」と捉えられるようになります。多動ですぐ席を立ってしまう子や登校を渋る子だけが特にみんなと違うのではなく、「誰もが違う」のです。

一人一人困り感が違う児童生徒を担当が適切につないでいくことで、安心感の高い学級集団が構築されていくのだと思います。そのような担任の姿は、児童生徒同士が友達関係をつくっていく上でも大きな影響を与えていきます。児童生徒が、将来の共生社会の担い手として成長していくためにも、「誰もが違う」ことを前提とした学級集団をつくりあげていこうとする素敵な担任の姿があるとよいと思います。

<好事例>

対象児童生徒がパニックを起こした時に、他の児童生徒が「〇〇さんは何か困ったことがあったのかな。」とつぶやいていた。

→ 担任が「適切に児童生徒同士をつないでいること」や「適切に対象児童生徒に関わっていること」などが他の児童生徒に影響を与えている。

## □ 校内支援体制

どの学校にも特別支援教育に係る校内支援体制として校務分掌や委員会組織がありますが、そこでの話し合いが有意義なものになるかどうかは、日頃から身近な教職員間で対象となる児童生徒を真ん中に据えたコミュニケーションをとっているかどうかにかかっていると思います。

さて、少し視点を変えますが、職員室には、困ったことがあった時は気軽に同僚に相談をしたり、逆に困っている同僚に積極的に声をかけたりするような同僚性はあるでしょうか。もちろん職員室にいるのは教育のプロ集団ですから、違った意見の応酬も時にはあるでしょう。しかし、背景には支え合いの同僚性があるほしいものです。毎日の児童生徒の指導・支援についての話し合いは、たとえ井戸端会議であっても、同僚からたくさんの気付きを毎日得ることができるある意味重要な研修の機会なのです。

教職員が支え合える学校は、校内支援体制をしっかり活用しながら自信をもって児童生徒と向き合っているようです。

<好事例>

担任、学年主任、特別支援教育コーディネーターが常に連携していたため、指導・支援で行き詰まった時も三者で連携し新たな手立てを早急に検討できた。学年主任が参加していることにより、対象児童生徒への新たな指導・支援について円滑に学年全体から情報を集めたり、周知したりすることができた。

→ 日頃の同僚性を基盤とした担任を支える校内支援体制が構築されている。

☆ 以上、簡単にまとめましたが、すべて巡回訪問した学校の熱意ある取組からエリア Co 自身が学んだことです。次年度も学校巡回訪問を実施しますので、学校の実情に応じてご活用ください。



河内教育事務所 HP も御覧ください。「竹林の風」バックナンバーも掲載しています。☛



教職員一人一人の誇りと品格は 教育への信頼を確たるものにする